竹添進一郎
井井

竹添進一郎井井

竹添井井　本名進一郎
幼少より学を好み神童の誉高く
十五歳にして木下韡村塾に入門する
二十二歳にして時習館訓導に
二十七歳　勝海舟と交流しその見識の深さに海舟も驚く
維新後開塾し師弟の訓育に当たる
明治八年特命全権森有礼の随員として清国に渡り広く大陸を旅する
その時の見聞録が「桟雲峡雨日記」
この旅行記は「東方見聞録」「大唐西域記」と並ぶ名著なり
井井二十一歳にして天草の詩を詠む

自茂木将帰天草似無舟止
水與天無際　蛟龍所伏蔵
風腥魚気黒　潮蘸日光黄
遊迹隨飛雁　帰心遂去檣
東南青一髪　遥認是家郷

〈註〉三大旅行記とは、マルコ・ポーロの「東方見聞録」、玄奘の「大唐西域記」、慈覚大師円仁の「入唐求法巡礼行記」といわれる。

漢詩「航天草灘」は後ページに意訳あり。

上天草市大矢野運動公園にある竹添進一郎の顕彰碑

竹添進一郎とは

竹添進一郎、竹添井井といっても、現在の天草人にとって、馴染みのない人物であろう。

事実、彼は天草にとって、具体的には何もなしていない。したがって、天草人にとって、馴染みがないのは当然である。

しかし、彼は、郷土の枠をはるかに飛び越え、さらに日本をも超え、外交官として、その存在を示した。

さらに、政務官の枠をも超え、旅行者であり、文学者でもあった。即ち、天草が生んだ偉人である。

今年（平成29年）は、彼の没後１００年になるという。その竹添進一郎展が、天草市立本渡歴史民俗資史料館で開催されている。

これを機に多くの天草島民に、竹添進一郎井井を知っていただければと思う。といいながら、筆者自身も、彼のことをどれだけ知っているのかと言われたら、ウムウムと言葉を濁すしかない。

天草の偉人と言われる人は、天草出身と他所の人、数あるが、他所の人で、天草のため尽力し、功績を残した人が多いようにも思う。

いや、それはどうでもいい事である。天草出身で、天草という一地方の枠を超えて、活躍した人、それも天草偉人であることは間違いない。

竹添進一郎という人を簡潔に知るためには、彼の業事績を讃えた、頌徳碑が、彼の出身地である、上天草市大矢野町に建てられているので、それを読むことが手っ取り早い方法だろう。

頌徳碑文

文学博士・竹添進一郎先生は、大矢野町大字上馬場の医師・小田順左衛門と二神家出の美加の一子として、天保十三年（１８４２）に出生。

幼少より学を好み、三歳にして経書を朗読し、神童の誉れ高く、当年十五歳熊本に出て、木下韡村（いそん）塾に入門。天性の学才は冴え、井上毅らと木下門下の四天王と称される。

22歳のとき細川藩に士分として召しだされ時習館訓導を勤める。

27歳、藩命により京都、奥州、江戸を探訪する。特に江戸では時の英傑・勝海舟を訪ね、国家大経を論じその見識の深さに海舟を驚かしめ、以後親しく交わる。

明治四年廃藩置県となるや、先生は城下寺原瀬戸坂に開塾、転じて現玉名市伊倉町に遜志斎を開き子弟の訓育にあたる。名を慕い学ぶものが多かった。

八年、塾を閉じて上京、勝海舟と再会し、海舟らの推挙により特命全権大使森有礼の随員として清国に渡る。次いで中国大陸中部以北の奥地を踏破し、名著《桟雲峡雨日記並詩草》を著し、日本国内はおろか中国文人等の絶賛を受けた。

明治十三年より清国天津領事、朝鮮弁理公使を歴任し、明治十八年朝鮮弁理公使を退任、引き続き無任所弁理公使として在任中、時の文部大臣・井上毅の要請により、明治二十六年十月東京帝国大学教授に就任。

明治二十八年（54歳）退官し、同年相州小田原に閉居、かねて念願の読書著作に専念。二十余年をかけての大著《左氏会箋》により帝国学士院賞と文学博士の称号を授かる。

明治三十五年皇太子嘉仁殿下（大正天皇）を小田原に迎え拝謁、

その夜、特に召されて前席講演ををなし、書を閲覧に供したことは特筆すべきことである。

又先生の次女須磨子は、講道館柔道の始祖・加納治五郎に嫁ぎ、その長男履信が竹添家を継いでいる。

大正六年三月三十一日、七十六年の生涯を全うし、政府より従三位勲三等を贈られた。

熊本県教育委員会は昭和二十九年近代文化功労者として顕彰し、その賞状末記に「天下の碩学と称せらるに至ったことは、洵後進を奮起せしむるものである」と記してある。

先生逝き80年、恰も世上混沌たるこの時、先輩諸賢意思を継承し、先生の遺訓と遺徳を偲ぶよすがとして内外の有志の賛同と協力を得て、茲に頌徳碑の完成を見るに至ったことは誠に意義深いものがあり、望外の慶びとするところである。（川上昭一郎記す）

平成十年三月吉日

竹添進一郎先生顕彰碑建立委員会　　会長　何川一幸

※木下韡村（いそん）　儒学者（１８０５－１８６７）菊池郡の生まれ。熊本藩校「時習館」で学んだあと、江戸の「昌平黌」などで学ぶ。のち、時習館助教に就任するとともに、木下塾も開く。門下生に、横井小楠、竹添進一郎、井上毅などがいる。

※森有礼　外交官・政治家（１８４７-１８８９）元薩摩藩士。明治18年伊藤内閣の下で初代文部大臣に就任し、日本の教育の発展に努める。明治22年、国粋主義者に暗殺される。享年43歳。

さらに具体的に知ろうと思えば、『天草近代年譜』松田唯雄著を紐解くことで、知る事ができる。

上天草市大矢野運動公園にある竹添信一郎の顕彰碑と碑文

竹添井井（進一郎）年譜（『天草近代年譜』より）

天保十三年（１８４２）　3月15日、大矢野上村に生れる。幼名満、父順左衛門筍園（俗称弥助）は、島原領内三室村庄屋小田家の三男にて、広瀬淡窓の塾に学び、碩学の聞えあり、もっぱら兄の子次右衛門の薫育に当たる。彼が庄屋役に就いた後、天草に来て大矢野上村に住み、付近の子弟を教えていた。

安政三年（１８５６）（15歳）　この年上村より熊本に出て、肥後の碩儒木下韡村の門に入り、研学に努める。

安政四年（１８５７）（16歳）　この春、竹添筍園、上村から新休村に移り、東向寺内に聴松堂を開塾する。それは、彼が実家から分与された資産は、一子進一郎の学資に当てることにしていたが、本家の災厄を救うために提供せざるを得なくなり、あらためて児の塾費（年４両）を得なければならなくなったためという。
この夏、熊本より帰省の機会を得て、新休村の父筍園の許に至る。一日、町山口村岡田芝山（84歳）の門を叩き、赤貧の中にも括然として容姿端正、眉眼昼のごとき高風に接し、敬服する。

安政五年（１８５８）（17歳）　木下門下のうち、井上毅、木村弦雄とともに、三才子と目され、これに古庄嘉門を加えて、四天王と言われる。
進一郎の字名「光鴻」「漸郷」は、師韡村から授けられた。
島原に遊び、「板倉公墓」を記し、「再過原城」の詩を作る。

文久二年（１８６２）（23歳）　木下塾の塾長となる。

文久三年（１８６３）（22歳）　この年、熊本藩に召出される。もと実家の小田姓を、師韡村の計らいで、竹添の株を取って改姓し、儒者として藩士に列する。
父筍園も新休村から町山口村に移り、河畔に塾を移す。

元治元年（１８６４）　12月3日　筍園町山口村の塾舎で病没、同村の慈眼院に葬られる。後墓碑は、進一郎により、玉名郡伊倉に

移される。

慶應二年（１８６６）（25歳）

４月、詩文引廻役を命じられる。
８月、岡田柴山の墓碑銘を撰し遺族に贈る。
10月、時習館訓導助役に任ぜられる。
12月、亡父筍園３回忌に当たり、町山口村へ帰省。

慶應三年（１８６７）

木下韡村死去。（63歳）
（26歳）。藩命により、御用船萬里丸修理のため上海に派遣される。（注・当時は鎖国制度のため、渡海は許されず、漂流として体を繕ったという）

明治元年（１８６８）（27歳）

１月、亀子と結婚。
新婚間もないこの月下旬には、藩命で京都、江戸、奥州等に使いし、東奔西走する。江戸では、勝海舟の草庵を訪ね、大いに国家の大計を論じ、海舟その卓識に感動する、
この年、江戸より帰藩するや、海外視察の必要を唱え、藩命を請うて語学習得のため、一先ず長崎へ留学する。
間をおかず、藩より召喚の上、罪あって捕縛されるかもしれず、一時身を隠すべきとの報を知友より得る。これは、進一郎が江戸で作った詩「弟を以って兄を討ち、臣君を伐つ、六十余州大倫無し、曲直唯成敗を以って論ず、孰れか是れ逆賊。孰か王臣」の詩が却って幕軍間に愛唱され、これを鼓舞する結果を招いたためという。そのため、密かに身をかくし、事なきを得る。時の人、これを称して竹添の詩禍という。

明治二年（１８６９）（28歳）

10月、韡村跡を受けの時習館訓導となる。

明治三年（１８７０）（29歳）

長女眞津子生まれる。
鞠獄（裁判）官になる。

明治四年（１８７１）（30歳）

７月の廃藩置県に際して、出仕を辞し、市中寺原瀬戸坂（玉名郡伊倉）に私塾を開く。講義は弁舌さわやか

で、耳に入り易く、音吐朗々門外に聞え、行き交う夫人や童子も思わず門前に足を留めたという。また、肥後国内はもとより国外からも学びに来る人多し。
塾生は20数名、天草からも5名入塾。

明治五年（１８７２）（31歳）　私塾を玉名郡伊倉に移し、孫子斎と称して引き続き育英の業に励む。塾生23名。熊本より従学する者少なからず。当時、天草よりこの門で学ぶ者は、久保山了、尾上晋、武田雪象等。

明治六年（１８７３）（32歳）　慈母を天草より迎える。岳父筍園の墓碑も町山口より伊倉に移す。

明治七年（１８７４）（33歳）　長女眞津子、夭折（5歳）。

明治八年（１８７５）（34歳）　この春、伊倉を出て上京。
勝海舟を再訪し、志しているのは、海外で仕事をしたいことを告げる。後日、海舟の斡旋により、11月特命全権公使森有礼の赴任に随行を許され、遠く清国に遊ぶ。
船中、公使と意見の食い違いがあったが、公使後に竹添の卓論に推服し、深く漢文を軽視すべからずを悟る。以後深い親交を持つ。

明治九年（１８７６）（35歳）　正月4日、一行とともに北京に到着、彼の地の諸名士と交わる。
夏5月より当時北京公使館一等書記官見習いの津田静一の案内で、巴蜀（はしょく）（注・今の四川省、重慶地方）の地を漫遊、遠く漢口に至り、百十余日の旅をする。

明治十年（１８７７）（36歳）　6月、巴蜀の旅日記である**『桟雲峡雨日記』**『桟雲峡雨詩草』を刊行。詩文兼長で中国人に愛誦される。

明治一一年（１８７８）（37歳）　10月勝海舟に序文を請い、桟雲峡雨日記を再刻する。
森有礼の口添えで伊藤博文に認められ、大蔵省に奉職、大蔵省書記官になる。

明治一三年（１８８０）（39歳）　選ばれて天津領事となり、天津に駐在する。芝罘（注・チーフー・今の山東省煙台市）、牛荘（注・現在遼寧省営口）も兼任。

明治一五年(1882)　(41歳)

4月1日天津領事のまま各判事を兼ねる。

7月23日、朝鮮漢城(注・後京城現ソウル)で内乱(壬午事変)起きる。暴徒は、王宮に乱入、日本公使館も襲撃される。弁理公使(注・特命全権公使と代理公使の中間に位する常駐外交使)花房義質等防戦するも遂に及ばず、仁川に逃れる。

翌24日、再び暴動起き、仁川府庁を襲う。花房公使等奮闘し、済物浦に至り、英鑑に救いを求める。英鑑は彼らを長崎に送る。外務卿井上馨、下関に急行し、公使花房を朝鮮に引き返させ、朝鮮に六ヶ条の要求を突き付ける。

8月30日、花房弁理公使、朝鮮全権大臣李祐元との間に修好条約調印成り、ようやく事が決着する。これを「済物浦条約」と云う。

11月6日、花房公使、外務省出仕を命じられ、天津領事竹添進一郎後任弁理公使に任ぜられる。

直ちに朝鮮漢城に弁理公使に任命され、漢城に駐箚。(注・外国に派遣された公務員がその地に一定期間滞在すること)する。ために、済物浦条約に従い、陸軍歩兵一個中隊を駐留し、居留民及び公使館の保護に当たる。

明治一七年(1884)　(43歳)

朝鮮漢城で再々事変(甲甲事変)起きる。

12月4日、同地で郵政局開業式が行われたのに乗じ、開国党の朴永孝、金玉均等が兵を起こして王宮に迫り、要路の重臣連を嗜虐する。国王は身の危険を感じ遂に日本兵の保護を求める。そのため駐韓公使竹添は、5日に兵を率いて赴き、王宮を護衛する。清兵はこれを誤視し、発砲。国王は遁れて清軍に投じる。漢城市街で暴徒蜂起し、混乱を極める。

6日、清将袁世凱、兵を2千を率いて、王宮を囲み、漢兵もこれに内応して、日本軍を砲撃する。そのため、竹添は兵を纏めて王宮より、公使館に引き上げる。

7日、清兵、漢兵はさらに大挙して日本公使館を襲撃する。止む無く竹添は居留民を保護して仁川に退く。仁川港にいた日本軍艦日進は直ちに陸戦隊を組織して守備に当たり、待機状態に入る。これを甲甲政変(京城事変)という。

異変の報は、13日に東都に入り、外務卿井上馨を韓国に急派し、これらの談判に当たらせる。公使竹添は、28日、一小隊を率いて仁川を発し、漢城に急行して特派全権の入京を待つ。

明治一八年（１８８５）（44歳）談判は正月7日に開始され、日本側特命大使井上馨、朝鮮側全権大臣金宏集で行われる。朝鮮側は直ぐに日本側の要求を受け入れ、５年を約して9日に「日韓講和条約」が締結される。
かくて11日、全権井上の退京に際し、公使竹添も行動を共にし、同月19日帰国。
甲甲の変に対して竹添が取った態度が、政府の意にそぐわないことを知り、病を理由に身を退き、弁理公使を辞す。
9月に入り、東京帝国大学に教授として招聘され、同校に得意の経書（注・昔、中国で儒教の基本とされた書物・四書五経など）を講ずる。

明治二三年（１９８９）（48歳）２月11日、時の文部大臣森有礼（44歳）刺客に倒されるの凶報に接し、いたくも哀悼痛惜措かず。

明治二六年（１８９３）（52歳）辨理公使を辞任。

明治二八年（１８９５）（54歳）年来の病気のため、帝大教授を辞し、小田原に閑居、もっぱら読書著作に従事する。

明治三五年（１９０２）（61歳）鶴駕（注・皇太子の乗る車）を小田原に迎え、皇太子（注・後の大正天皇）に拝謁する。その夜、特に召されて、皇太子に講演を行う。退席に当たり、老病慰労を賜り、感泣する。また、皇太子に大書して進覧する。

明治四二年（１９０９）（68歳）10月、郷里天草を訪ね、門人たちと旧交を温める。

大正三年（１９１４）（73歳）昔著した「左氏会箋」により、**学士会院賞**を受け、文学博士を授けられる。

大正四年（１９１５）（74歳）郷土天草の門人等、一日熊本の白水館に会合、遥かに師の寿を祝し、人を派し、素絹一端を献じる。

大正五年（１９１６）（75歳）６月、妻亀子死去。

大正六年（１９１７）（76歳）３月31日、突然として逝く。東京小石川音羽護国寺に葬られる。諡、好学院井々居士。

年譜は『天草近代年譜』松田唯雄著　及び『竹添進一郎先生顕彰碑期成会　を元に作成したが、注釈や現代語または、当時の地名など、若干の編集を加えた。

竹添井井・天草を詠む

自茂木将帰天草似無舟止

水与天無際　　蛟龍所伏蔵
風腥魚気黒　　潮蘸日光黄
遊迹隨飛雁　　帰心遂去檣
東南青一髪　　遥認是家郷

郷土史家故鶴田文史氏は、「天草の史談と文芸・第30号」で、竹添井井の「自茂木将帰天草似無舟止」の漢詩を取り上げている。
ただし、限定本で、読者の多くはこの文を目にすることはないと思われるので、ここに転載する。

《直訳》

茂木自リ将ニ天草ヘ帰ラント似テ舟ヲ止メルトコロ無シ
水與天ハ際ナシ
咬龍ノ伏蔵スル所
風腥魚黒ニ気ツク
潮蘸ッテ黄バム日光ニ
飛雁ニ随イテ遊迹ス
帰心遂ニ檣ヲタテテ去ル
東南青一髪
遥ニ是ヨリ家郷ヲ認ム

《意訳》

茂木よりまさに天草へ帰らんとするに舟止りする所はない
海と天とは限りなく続く。
水中の龍は海の深い所に生息している。
風のように泳ぎ廻っているイルカは黒々として活気があり、
海原は落日前の太陽の光に浸り黄金色に輝いている。
従ってそのあとに遊ぶかのように古巣へ向かっている雁を見て、
わが里に帰りたい心が船の帆を上げて櫓を漕ぎ進んで行く。
ここ千々石湾から、東方に有明海、南方に天草灘が存在し、どちらも天と海が区別できないほどのありさまに広がっていて、
遥かに今居るここからわが家のある有明海に浮かぶ大矢野島の古郷が見えるようだ。

《寸評》

井井の「自茂木将帰天草似無舟止」の漢詩は、千々石湾上で天草灘・有明海を遠望しながら、大自然の中での作者の創造深い観察を表現した秀詩である。
長崎から茂木港を出港した船が、天草大矢野島へ向かう作者。普通の人の場合、目に見える風景を詩的表現するに止まるのが

普通だが、井井は目には見えない海中の奥底まで見えるかのように表現する。そこには、蛟龍（鱗のある水龍）が住んでおり、また山陽の「泊天草洋」の大魚、即ち腥魚（いるか）を風腥魚として登場させている。気黒とあるのは、黒（やみ）に活気づくと解される。

去檣は、檣（ほばしら）を立てて去る、すなわち船出をしていること。

東南は、南の天草灘、東の有明海の方向であるが、井井は東の方向の家郷に対して望んでいる。

井井のこの詩は、山陽の「泊天草洋」を意識しながら、国際的ではないが、海底に潜んでいるという、蛟龍までも見通す、創作的描写を含めて、表現が先妻であり活動的である。

《筆者考》

鶴田氏は、三行目を「風**腥**魚気黒」としているが、『天草の文学』武藤光麿編著には、「風**醒**魚気黒」となっている。

前出鶴田誌の詩を天草の文学編に書き改めると。

自茂木将帰天草似無舟止

水与天無際　　蛟龍所伏蔵
風**腥**魚気黒　　潮蘸日光黄
遊迹隨飛雁　　帰心遂去檣
東南青一髪　　遥認是家郷

となる。

つまり、「風腥魚気黒」の二字目「腥」が「醒」と違っている。すれば、意味も全然違うことになる。鶴田氏の言うように「腥魚」がイルカなのかどうか、漢和辞典をみても載っていない。「腥」は〝生臭い〟という意味である。したがって、イルカに無理にこじつけた感もある。

一方「醒」は、〝さめる〟という意味である。一般的に酒が覚めるというように使われるが、「風醒魚気黒」となれば、風がおさまり、波が無くなったことで海中にいる魚の気配が黒々と漂ってきたと解釈できないだろうか。鶴田氏の「風腥魚黒（いるかやみ）ニ気（いき）ツク」は、若干無理があるようにおもえる。

と思うが、如何だろうか。

ついでに、同『天草の文学』に、竹添井井の詩がもう一つ載ってる。この詩は、勝海舟に捧げる詩と思えるが、漢文に素養のない筆者には難解なので、詩文だけの紹介にとどめる。

次勝海舟公見示詩韻以奉呈

強之食弱之食肉　　啗蓋肌膚及心腹
不知食竭身亦亡　　独有識者篙其目
西洋颶風来蓬々　　黒浪高捲神州蹙
不向海上屠鯨鯢　　兄弟相争中原鹿

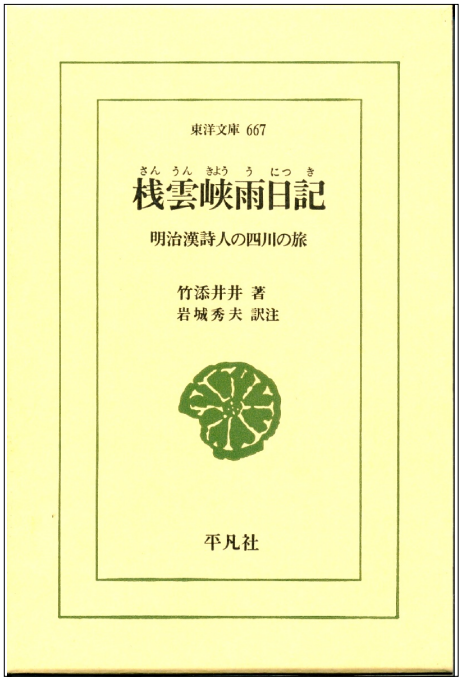
井井は、明治元年、27歳の時、勝海舟を訪ねている。海舟は井井の卓識に大いに驚いたという。森有礼の随行となったのも、勝海舟の斡旋によるという。（年譜参照）

『桟雲峡雨日記』

頌徳碑文にあるように、竹添進一郎（井井）は、明治８年（１８７５）森有礼の駐清全権公使就任にともない、随行して清国へ渡った。その期間に、１１１日に及ぶ中国各地を旅して記したのが、この『桟雲峡雨日記』である。ここにあげた本書は、我々が読めるように岩城秀雄氏の労により、口語体に訳されているが、元は漢文である。

ついでながら、訳注者の解説のページを借りて、井井が旅した行程を記すと。

明治９年（１８７６）５月２日に北京を出立し、保定・石家荘・邯鄲を経て、洛陽に至り、さらに函谷関から西安に行き、これより泰嶺を越えて、南鄭から剣閣へと桟道の難所を進み、西都、そしてさらに重慶に至った。

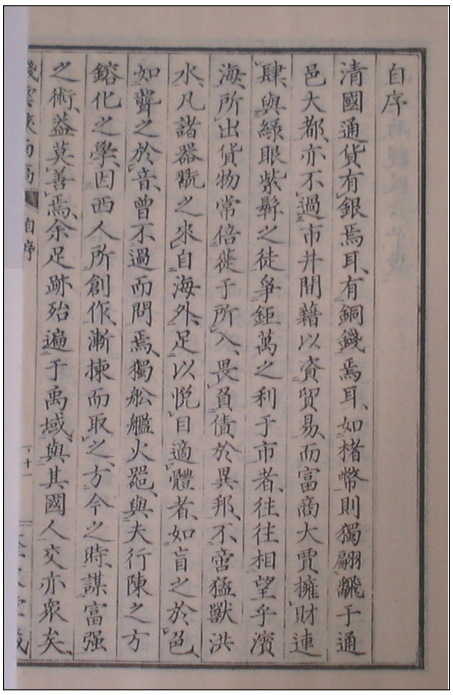


桟雲峡雨日記
2000年2月9日　発行
訳注者　岩城秀雄
発行所　平凡社

そのあとは、長江を船で下り、三峡を通過し、洞庭湖の景観をほしいままにして、８月11日に上海に到達した。

井井は、「はじめに」でこう記している。（山城秀夫訳）

明治八年（１８７５）乙亥の歳の十一月、私は森公使に随行して清国に渡航した。



桟雲峡雨日記　原著　　明治12年3月　出版
右は表紙、左は序文頁
近代書誌・近代データベースより

北京の公使館に駐まること数か月、四川から来た旅行者が、その地の山水風土について語るのを耳にするたびに、わたしはそぞろ心も落ち着かず、魂は四川に飛ぶ思いで、圧さえようにも圧さえきれなくなってしまった。かくして公使にお願いし、津田君亮とともに、九年（１８７６）五月二日旅装をととのえて出発した。

現在でも百日に及ぶ中国の旅は至難であるが、更に現在とは比較にならない当時の中国旅行は、大変な困難が伴ってたはずだ。

本書は、口語体に訳されているとはいえ、中国の地名の漢字が難しく、読みづらいが（ルビがふってあるがないのも多い）、それでも、我慢して読むと、井井の意が伝わってくる。

また、注が多く、そして詳しく付けられているので、単なる読み物というより、歴史書・地理書とも言えよう。

長旅を終え、北京に着いた八月二十一日でこの日記は終わっている。

ちょっと長くなるが、この旅行最後の日の日記を抜粋してみよう。

八月二十一日　船は上海に到着した。（中略）

この度の旅行は百十一日間、行程は九千余里であった。おおよそのところ、車を使ったのは十分の二、轎（かご）は十分の三、船旅は車と轎を合せたのと、ほぼ同程度であった。

（中略）

思えばわたしは年まさに少壮であるから、いつの日か嶺南（今の広東省・広西壮族自治区・ベトナム地方）を旅することができるかもしれない。羅浮山（広東省広州市増城県の東北。梅の名所）に梅花をたずね、両広（広東・広西）において潮を観て、桟雲峡雨日記の続編を書くならば、なんとも楽しいことではないか。

古人は「隴を得て蜀を望む」といっている。わたしはすでに隴（甘粛省）の境まで歩きまわって、さらに蜀（四川省）の名勝を訪ねつくしたのであるが、それでも厭きることがない。人というのは、足るを知らないことに苦労するものである。

井井は、約１１０日をかけて、中国内陸部の旅をした。行程を九千余里としている。キロメートルに直すと、約３万５千km。それでも、中国全体からすると、ほんの一部でしかない。ちなみに、ほぼ日本全土を測量した伊能忠敬は、４万３千kmを歩いている。ただ、伊能は測量の旅であり、全て歩行距離である。したがって一概に比較するのはおかしいが、井井は、１１０日で、伊能が３千７百余日かけて歩いた距離を旅していることになる。船の旅は旅全体の半分と、駆け足の旅とは言え、気の遠くなるような距離である。

井井は恐らく中国語を話せなかったと思う。漢字が共通語の役割を果たしていたとはいえ、地名も詳細に記録している。筆者などは、３日もしないうちに、匙を投げると思うが、井井のち密さと根気には、伊能忠敬同様、畏怖の念さえ覚えるほどだ。

井井が中国を旅したのは。35歳の時であった。井井の言うように、まだ若かったので、もし、井井が役人にならず、一介の旅人としての人生を送ったならば、我々はもっともっと、素晴らしい作品を読むことができたし、井井もよりより人生を送ることができたかもしれない。

しかし、時は混沌とした時代、才子井井にその自由を許してくれなかった。

個人蔵

竹添 進一郎（たけぞえ しんいちろう、1842年4月25日（天保13年3月15日） – 1917年（大正6年）3月31日）は、日本の外交官、漢学者。名は漸、字は光鴻（こうこう、みつあき）、号は井井（せいせい）と称した。 甲申政変時の朝鮮弁理公使であり、後に漢学者として活躍した。日本学士院賞受賞。熊本県近代文化功労者。

来歴

肥後国天草（現・熊本県上天草市大矢野町）生まれ。父である小田順左衛門（竹添筍園）は、肥前国島原出身の医者で、天草大矢野島に移り住み、上八幡宮の宮司二上出雲の娘である美加と結婚した。順左衛門は儒学者広瀬淡窓門下十八傑の一人でもあり、進一郎が幼い頃より儒学を教えた。

1855年（安政2年）15歳の時、天草より熊本に出て儒学者木下韡村の門下生となった。学業は極めて優秀で、木下門下では、井上毅、木村弦雄と三才子と称され、さらに古荘嘉門を加えて四天王といわれる。藩校時習館の居寮生となり、木下のはからいで士分に取り立てられ、藩命により京都、江戸、奥州を訪れる。江戸では勝海舟の知遇を得る。

1871年（明治4年）、廃藩置県で失職し熊本市や玉名市で私塾を営んだ後、1875年（明治8年）に上京する。勝海舟の紹介で森有礼全権公使に随行し、清国へ渡った。同郷の津田静一と共に清国を旅し「桟雲峡雨日記」を記した。天津領事、北京公使館書記官などを経て、1882年（明治15年）、花房義質の後任として朝鮮弁理公使となるが、甲申政変に深く関わり辞任した。

1893年（明治26年）、東京帝国大学教授に就任し漢文学を講じた。退官後、小田原に暮らし、76歳で没した。1914年（大正3年）、日本学士院賞受賞（第4回）。文学博士。従三位勲三等。熊本県近代文化功労者。次女の須磨子は、講道館柔道の創始者である嘉納治五郎と結婚した。媒酌人は、木下韡村の次男で後に京都帝国大学の総長となった木下広次が務めている。

以上ウィキペディア